



皮錫瑞の「微言大義」説について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010722

皮錫瑞の「微言大義」説について

吉 田 勉

はじめに

梁啓超『清代學術概論』や支偉成『清代樸學大師列伝』が指摘するように、清代の今文学派は「微言大義」なるものの闡明に努めたとされる。この語は『漢書』芸文志および同劉歆伝を^①出典とするもので、端的に言えば、孔子やその高弟たちの教えを意味する。そして、梁啓超らの指摘通り、微言大義の語は今文学者の著作中に散見されるのであるが、なかでも、その具体的な定義として従来しばしば援用されてきたのが、清末湖南の今文学者、皮錫瑞（一八五〇～一九〇八）の説である。

皮錫瑞は晩年の著作『經学通論』において、經書の一つ『春秋』に込められた微言大義の内容を規定しているが、その説は古今・内外を通じて広く祖述されており、目下、微言大義に関する言説を代表するものとして扱われている。^②その一方で、皮錫瑞の説それ自体を対象とした考察は、ほとんど行われな^③いままであった。しかし、今文学者が広く微言大義を標榜したのであれば、そこには必ずや学者ごとの相違があるはずであり、そ

の点に着目してこそ、各々の今文学者の特徴や、延いては今文学の思想的展開が明らかになるのではないか。本稿は、そのための第一歩として、皮錫瑞説成立の背景や過程を明らかにすることで、その相対化を試みるものである。^④

一 皮錫瑞説の整理

『春秋』の微言大義に関する皮錫瑞の説は、その『經学通論』のうち、春秋部分の冒頭一条に記されている。^④内容から分析すれば、本条は二分できると思われるので、以下、前半と後半とで項を分けてその内容を確認し、いくつかの特徴を指摘することとしたい。

（一）微言大義の定義と『孟子』

まずは前半部分。本条の冒頭で、皮錫瑞は『春秋』に大義と微言と二つの要素が含まれるとして両者を区別するとともに、各々の定義を簡潔に示す。

『春秋』に大義有り、微言有り。所謂大義なる者は、乱賊

を誅討して以て後世を戒むる、是れなり。所謂微言なる者は、法制を改立して以て太平を致す、是れなり。

その上で「此れ『孟子』に在りて已に之を明言す」として、この定義の根拠となる『孟子』の記述を二つ引用する。その一つは滕文公下篇の次の箇所。

世衰へ道微にして、邪説暴行、又た作る。臣にして其の君を弑する者、之れ有り、子にして其の父を弑する者、之れ有り。孔子懼れ、『春秋』を作る。『春秋』は、天子の事なり。是の故に孔子曰はく、我を知る者は其れ惟だ『春秋』か、我を罪する者は其れ惟だ『春秋』か。

いま一つは離婁下篇の次の一章。

王者の迹熄みて『詩』亡び、『詩』亡びて然る後に『春秋』作る。晋の乗、楚の檮杌、魯の春秋は、一なり。其の事は則ち齊桓・晋文、其の文は則ち史。孔子曰はく、其の義は則ち丘、窃かに之を取る。

各々の引用の下には、これら『孟子』の文章に対する趙岐と朱子の注も引かれているが、それは後半部分における論証の材料となるものである。

そして、この『孟子』の記述と微言・大義との関係を、次のように整理する。

孔子、君を弑し父を弑するを懼れて『春秋』を作る。「『春秋』成りて乱臣賊子懼る」は是れ『春秋』の大義なり。「天子の事」「我を知り我を罪す」「其の義は窃かに取る」は是

れ『春秋』の微言なり。大義は顕にして見易く、微言は隠にして明らかにし難し。孔子、人の知らざるを恐る。故に自ら其の旨を明らかにせざるを得ず。

以上が本条の前半部分に相当する箇所だが、ここから読み取れるのは、皮錫瑞が微言と大義を区別しつつ、『孟子』の記述によつてそれらを定義することである。この『孟子』による定義という点は、皮説の特徴の一つに数えられよう。

(二) 『孟子』と公羊家説との合致

後半にかけては、『孟子』と『公羊伝』との関係を述べる次の一段を起点に、『孟子』と公羊家の説との合致を論証する。

「其の事は則ち齊桓・晋文」の一節は、亦た『公羊』昭十二年伝に見え、大同小異なり。⁵⁾ 孟子の『春秋』の学、『公羊』と同一の師承なるを見るに足る。故に其の微言を表章すること、深く『公羊』の旨を得。

孟子と『公羊伝』とは同一の師承に属するとした上で、後半では専ら微言、すなわち、先の定義で言えば「法制を改立して以て太平を致す」ことに重点を置いて、両者の合致を論証していく。なお、この微言の内容は、公羊家の言う素王説なるものに相当すると言えり。⁶⁾

ここで両者の合致を説く根拠となるのが、前半部分にすでに引用されていた趙岐と朱子の注である。趙岐は『孟子』に注するに当たつて「素王」という語を用いている。以下に見るよう

に、皮錫瑞が「趙岐は漢人にして、其の時『公羊』通行す」と指摘する通り、これは正しく漢代に流行した公羊家説に基づく注だと言えるが、皮錫瑞はさらに、趙岐ばかりでなく朱子の注も、胡安国『春秋伝』を引用しつつ素王説と同一の内容を説いているという。

朱子の注に引く『胡伝』も、亦た『公羊』の素王説と合す。

……『胡伝』に曰はく「其の位無くして南面の權に託す」と。此れ素王の説と、以て異なること有らんか、以て異なること無からんか。趙岐は漢人にして、其の時『公羊』通行すれば、岐、引きて以て『孟子』に注するは、固より怪しむに足ること無し。朱子の若きは宋人にして、其の時『公羊』は久しく絶學と成り、朱子も亦た『公羊』を墨守する者に非ず。胡安国『春秋伝』は、朱子、亦た深く信ぜざるも、而れども此の注に於いて、『胡伝』を引きて説を為さざる能はざるは、誠に『孟子』の義は本より是くの如く、是くの如からざれば則ち『孟子』を解して通ずる能はざるを以てなり。

『公羊伝』が絶學状態にあった宋人の説でさえも素王説に合致するならば、『孟子』の記述は、公羊家の素王説と合致するものとして解されねばならないと言うのである。

この後半部分の記述からは、趙岐・朱子の注を根拠として、『孟子』と公羊家の素王説との合致を論証することが読み取れる。つまり、趙注・朱注によって、自身の微言に対する定義が

臆説ではないことを論証するのだが、この点も皮説の特徴の一つに数えられよう。

改めて整理するならば、皮錫瑞の説には、第一に『孟子』の記述によって『春秋』の微言大義を定義すること、第二に『孟子』の趙岐注・朱子注を根拠として微言に対する定義を論証すること、という二つの特徴が認められると言えよう。

ただし、皮錫瑞が引用する『孟子』の文章は、『春秋』に関する記述として周知のものであるから、あるいはこれに注目することは、何ら異とするに足らないと思われるかも知れない。しかし、本稿冒頭で指摘したように、微言大義という語が今文学派によって唱道された事実を考慮するならば、この語によって『孟子』の記述を再解釈する点に、皮錫瑞の今文学者としての立場を見ることができよう。そして何よりも、右に指摘した特徴を、彼の生きた清末の湖南という時間・空間に還元して捉え直すならば、そこには、かかる説を唱えるに至った必然的な背景があると考えられるのである。『經学通論』は皮錫瑞晩年の著作である。この晩年定論がいかなる経緯によって生まれたのか、次に清末湖南の学術界との関聯から捉え直すこととしたい。

二 皮錫瑞と清末湖南の学術界

光緒二十四年（一八九八）、すなわち戊戌の年は、康有為を中心に新政が試みられ、やがてそれが挫折した年として知られ

るが、この戊戌の政変に先駆けて、湖南でも変法派と保守派の対立が尖鋭化したことが知られている。⁷⁹ここでは、両派の代表的人物とも言える梁啓超と葉德輝とを取り上げて、彼らと皮錫瑞との交流から、皮説の背景となる時代状況を確認したい。

(一) 時務学堂と梁啓超

梁啓超(字は卓如。一八七三―一九二九)は、師の康有為と並んで「康梁」とも称されるように、変法運動の中心的人物と言える存在だが、皮錫瑞は地元湖南の長沙において、この梁啓超と交流を持っている。梁啓超自身の語るところによれば、上海で「時務報」を拠点に師説の喧伝に努めていた彼が、はるばる長沙へとやって来たのは、次のような経緯による。

已にして嗣同は黄遵憲・熊希齡等と、時務学堂を長沙に設け、啓超を聘して講席に主たらしめ、唐才常等を助教と為す。啓超至り、『公羊』『孟子』を以て教へ、課するに簡記を以てす。⁸⁰

梁啓超は、湖南出身の同学、譚嗣同や、黄遵憲・熊希齡ら同地の官吏の求めに応じて、長沙に新設された時務学堂に赴いたのだという。注目すべきは、ここに記されているように、梁啓超が時務学堂において主に『公羊伝』と『孟子』を講じたことで、このことは、先に整理した皮錫瑞説の特徴と関わるものとして注目される。しかも両者の関係は、かかる皮相のレベルに止まらない。皮錫瑞は早速、梁啓超と交流を持ったようで、そ

の日記に次のような記述が見られる。

学堂に到りて卓如に見え、略は「春秋」の学を談す。彼、即ち堂に升りて講学す。窃かに数語を聴くに、是れ「孟子」の中の告子・子莫の學術を説く。学生は筆を執りて録記し、加ふるに發明を以てす。予謂へらく、後世、士を取ること有りて、士を教ふる法無し。此くの如くにして方めて是れ教へなり。⁸¹

皮錫瑞は時務学堂における梁啓超の教育を絶賛するのであるが、そこでは確かに『孟子』が講じられているし、両者は「春秋」についても直接意見を交わしている。さらに梁啓超には、時務学堂において『孟子』と「春秋」をいかに読むかの綱領を示した「読孟子界説」「読春秋界説」なる文章があるが、⁸²皮錫瑞は本人からこれを受け取って、日記にもその一部を抄録している。

梁卓如、著す所の「読春秋界説」一卷を送りて見示す。公羊家の言を發明す。其の精なる者に云ふ「……」。梁氏の文筆甚だ暢る。予をして之を為らしむれば、此くの如く透徹なる能はず。才力の相ひ去ること遠し。⁸³

ただ、なおも意に満たない部分があったようで、数日後の日記には次のように云う。

前に卓如の「読春秋界説」を観るに、予が意、尚ほ未だ尽くさざる有り。再び「春秋義説」を作り、互ひに相ひ發明し、撰して一篇を成さんことを擬す。⁸⁴

これによれば、皮錫瑞は梁啓超の「読春秋界説」に啓発されて、自ら『春秋義説』なる著作の執筆を試みたという。実際に日記に徴しても、この後一ヶ月ほどの間、彼がその執筆に取りかかっている様子が窺える。この『春秋義説』は現在、伝わらないが、それでも、現存する著作から見ても、皮錫瑞が「読春秋界説」から影響を受けていることは十分に認められる。例えば「読春秋界説」の第一条「春秋」を孔子改定制度以教万世之書」では、孔子が「春秋」を著したことを黄宗羲の『明夷待訪録』等に比擬して次のように述べている。

既に已に用ゐられざれば、則ち空文を垂れて以て来者を待ち、亦た其の平日の懐く所の者に本づきて之を著すは、又た何ぞ異とするに足らんや。黄梨洲に『明夷待訪録』有るは、黄氏の改制なり。王船山に『黄書』有り『噩夢』有るは、王氏の改制なり。馮林一に『校邠廬抗議』有るは、馮氏の改制なり。凡そ士大夫の書を読みて心得有る者は、當時の制度に未だ善からざる処有るを覚ゆる毎に、以て之を变通すること有らんと思ふ。此れ最も尋常の事なり。孔子の『春秋』を作るも、亦た猶ほ是くのごときのみ。夫れ梨洲・船山・林一の能く為す所の者を以てして、必ず我が孔子の之を為すを許さざるは、此れ何の理ぞや。

梁啓超は、孔子もまた後世の黄宗羲らと同じく、自身の理想を託す手段として『春秋』を著したとしてるのであるが、同様の記述は皮錫瑞の著作にも認めることができる。

所謂改制とは、猶ほ今人の变法と言ふがごときのみ。法は積むこと久しくして必ず変ず。志有るの士は、世に用ゐられざれば、書を著して説を立て、其の变ぜんと欲する所の法を以て後世に伝へんと思ひ、其の実に行はるるを望まざるは莫し。周・秦の諸子より、以て近ごろの船山・亭林・梨洲・惺亭の諸公に及ぶまで皆然り。亭林の『日知録』に明らかに云ふ「言を立つるは一時の為ならず」と。船山の『黄書』『噩夢』は、読む者、未だ嘗て其の僭妄を疑はず。何ぞ独り孔子の『春秋』に於いて、反りて僭妄を以て之を疑はん。

両者を比較すれば、論述の主旨はもとより、王夫之の『黄書』『噩夢』を引き合いに出すところなど「読春秋界説」からの影響は歴然と言えり。なお同様の記述は、湖南学政の徐仁鏞が著した『輜軒今語』にも見られる。このように、梁啓超の説が当時の湖南において拡がりを見せていることや、皮錫瑞がその梁啓超から啓発と影響を受けている事実から推せば、皮錫瑞が『孟子』と公羊家説とに着目した背景には、梁啓超の存在を想定することができるだろう。梁啓超が湖南に滞在したのは、光緒二十三年の冬から翌二十四年の年初にかけての僅かな期間であったが、この間の交流は、皮錫瑞の「微言大義」説にとつて少なからぬ意味を持つと考えられる。

(二) 南学会講義と葉德輝

年が明けて光緒二十四年になると、皮錫瑞は変法派の巡撫陳宝箴らが開設した南学会の学長に推挙され、講学を担当することとなった。この南学会での講義の中には、『孟子』を引用しつつ『春秋』の性質を説いたものがあり、実際に当時から梁啓超に共鳴していることが確認できる。その一方で、梁啓超らに反対する葉德輝からは、これに対して強い批判を受けることになる。次にこのことを確認しよう。

皮錫瑞は、南学会において前後十二回の講義を行っているが、そのうち三月二十日に行われた第八次講義は、当日の日記に自ら「『春秋』の大義を説く」と記すものであり、その中には、前節で整理した『經学通論』の説に類似する内容が述べられている。皮錫瑞の南学会第八次講義に云う。

孟子、公孫丑の問ふに答ふるに「孔子、『春秋』を成して乱臣賊子、懼る」を以て、禹の洪水を抑へ、周公の夷狄を兼ね猛獸を驅るの功と並び称す。又た「孟子曰はく、人の禽獸に異なる所以の者は幾ど希なり」以下四章は、文義一貫し、「舜、庶物に明らか」より以下、禹・湯・文・武・

周公を歴挙し、遂に孔子の『春秋』を作るに及び、終ふるに「予、未だ孔子の徒と爲るを得ざるなり。予、私かに諸を人に淑くするなり」云云を以てし、亦た孔子、『春秋』を作るを以て、舜・禹の諸聖人と並び称す。朱子の注に曰はく「此れ上章の群聖を歴叙するを承け、因りて孔子の事

を以て之を繼ぐ。而して孔子の事は、『春秋』より大なるは莫し。故に特に之を言ふ」と。是れ朱子、此の數章を以て一氣の説と作し、緯書の云ふ所の「志は『春秋』に在り」公羊家の云ふ所の『春秋』素王と符節を合するが若し。

……朱子、『孟子』に注して曰はく「孔子を罪すとは、以謂へらく其の位無くして二百四十年南面の權に託す」と。

「其の位無し」は即ち素王なり。「二百四十年南面の權に託す」は即ち王を魯に託するなり。學者、緯書・「公羊」を信ぜずして、亦た將た並びに孟子・朱子を信ぜざらんや。¹⁷⁾

ここでは『孟子』滕文公下篇及び離婁下篇の記述を引用するとともに、それらに対する朱子の注をも引きながら、『孟子』の記述が公羊家の素王説と合致することを説いている。つまり、ここには微言大義という語こそ用いられていないが、その説くところは、先に見た『經学通論』の説とほとんど同じと言ってよい。したがって、この南学会第八次講義は、『經学通論』の説の形成過程を探るに当たっても、その萌芽的なものとして注目される。

その一方で、当時、このような皮錫瑞の言論に対して強い異議を唱えたのが葉德輝（字は煥彬。一八六四―一九二七）である。¹⁸⁾この講義の約一ヶ月後、閏三月二十九日の日記に、皮錫瑞は以下のように記している。

葉煥彬の書の、山膏の罵るを好むが如きもの、及び刻する

所の『輶軒今語評』に接す。此の人、此くの如きの陋なるを料らず。中間に大なる笑話多し。何ぞ苦しむこと乃ち爾る。是の日は時務学堂の月課にして、欧・韓・葉の三君、秉三・絳丞、皆、此ここに到る。同じく其の書を閲るに、之を晒はざる莫し。

この日、葉德輝の抗議の書信とその著作『輶軒今語評』を受け取った皮錫瑞は、時務学堂教習の欧策甲・韓文學・葉寬邁、それに熊希齡や唐才常らとともに、それを一笑に付している。この『輶軒今語評』は、前出の徐仁鏞『輶軒今語』に反駁すべく、葉德輝が一条ごとに評語を加えたものである。徐仁鏞は經学・史学・諸子学・宋学の四部門について、それぞれいくつかの条目を掲げて諸学の綱領を略述するのであるが、その經学の第一条には「經学当求微言大義、勿為考据訓詁所困」と題している。煩瑣な考証を捨てて、前漢の学者に淵源する微言大義の学に戻ることを提唱するのであるが、これに対する葉德輝の評語は以下の通り。

外患日々に迫り、凡そ學術・經濟を空談する者は、同じく無用に帰す。未だ微言大義の致用の、即ち能く考据訓詁に勝るを見ず。特だ微言大義は以て近事に比傳すべし。故に此れを藉りて以て其の私を行ふ。此れ則ち西漢の諸儒、聞きて痛哭流涕する者なり。

すなわち、康有為ら現今の今文学者が標榜する微言大義は附会に過ぎないと断するのである。徐仁鏞『輶軒今語』は、この他

に『公羊伝』や『孟子』を学ぶべきことも主張するのであるが、葉德輝はそれらに対しても一つ一つ反駁を加えている。¹⁹⁾ こうした『輶軒今語評』の記述に対する不満から、皮錫瑞は葉德輝に書信を送って、次のように非難する。

大著は康氏の学を惡むに因りて、並びに怒りを古人に遷し、『孟子』を詆り、『公羊』を詆る。²⁰⁾

この皮錫瑞からの批判に対して、葉德輝から弁解の書信が届けられると、皮錫瑞は再び日記の中に返信の原稿を記している。その中に次のような記述が見られる。

弟、初めて講学するに、公に『孟子』『公羊』を言ふこと勿れの教へ有るを承くるも、而れども其の後、略ぼ之に及ばざる能はざるは、此れ意有りて公と背馳するに非ず。実に学会の講ずる所は民智を開くに在りて、聴く者は人、雑にして多く、必ず此くの如くにして乃ち孔教を推尊して變法の説を引伸すべきを以てなり。²¹⁾

葉德輝は、梁啓超やその師の康有為が『孟子』『公羊伝』を顕彰することに反対しており、皮錫瑞もそのことを承知していたのであるが、皮錫瑞はそれでもなお、南学会においては自身の信念から、断乎として『孟子』『公羊』の学を講じたのである。

右のような清末湖南の學術界の状況を考慮するならば、先に整理した皮説の第一の特徴、すなわち『孟子』によって『春秋』の微言大義を定義することの背景には、梁啓超が唱道し、徐仁鏞も賛同したような、当地における『孟子』『公羊伝』の流行

が想定されるのである。また第二の特徴、すなわち趙岐や朱子の注を根拠として微言に対する定義を論証することの背景には、微言大義が附会に外ならないとする葉德輝らの批判に応える意図があると考えられる。

このように、『經学通論』の説をめぐっては、南学会講義をはじめとして、光緒二十三年から二十四年当時の皮錫瑞が置かれた状況と、それに由来する彼自身の意図とを読み取ることができるのであるが、さらに、これらと晩年の『經学通論』とをつなぐものとして、いま一つ注目すべき著作がある。次節ではこの著作に基づいて、さらに皮錫瑞説の形成過程をたどろう。

三 皮錫瑞説の形成過程

皮錫瑞は光緒三十四年に卒しているが、『經学通論』はその前年、光緒三十三年に脱稿している。注目すべきは、この『經学通論』に先立って著された『師伏堂春秋講義』という著作で、そこには微言大義に関するまとまった記述が見出される。

卷末に附された息子の皮嘉祐の跋文によれば、該書は湖南高等学堂・湖南中路師範学堂・長沙府中学堂における皮錫瑞の講義を、その死後にまとめたものだという。ただし、皮錫瑞は光緒二十九年以来これらの学堂で教育に携わっており、また光緒三十年八月十八日の日記に「春秋講義」を録す」とあるのははじめとして、以後の日記には講義原稿執筆の記事が散見されるから、『師伏堂春秋講義』は、生前のこの時期の説を伝える

ものと見て差し支えないだろう。該書は上下二巻から成るが、そのうち上巻の第十七条には、次のような記述が見られる。

蓋し『春秋』に大義有り、微言有り。大義は乱臣賊子を誅するに在り、人人、尽く知る者なり。微言は後王の為に法を立つるに在り、人人、尽く知る能はざる者なり。孟子、又た之を明言す。曰はく「春秋』は、天子の事なり。是の故に孔子曰はく、我を知る者は其れ惟だ『春秋』か、我を罪する者は其れ惟だ『春秋』か」と。趙岐の注に「素王の法を設け、天子の事と謂ふなり」と。……朱注の引く胡氏曰はく「孔子を罪すとは、以謂へらく其の位無くして二百四十年南面の権に託す」と。「其の位無し」「南面の権に託す」は、正に是れ空に一王の法を設くるなり。素王は『公羊』の説に出で、『孟子』は『公羊』と合す。趙岐は後漢の人なれば、是れ『公羊』を習ふ者なり。朱子は宋人にして、『公羊』を習ふに非ざるも、而れども『孟子』に注するに胡安国『春秋伝』を引きて以て之を解せざる能はず、其の説、『公羊春秋』の素王の義と略は同じ。此くの如からざれば『孟子』を解する能はざるを以てなり。

大義と微言を区別して各々の定義を明言することや、『孟子』とその趙岐注・朱子注を引用してそれを論証する点など、先に整理した『經学通論』の説との類似は明らかである。それと同時に、南学会第八次講義以来、一貫して『孟子』とその注を重視していることも、改めて確認することができよう。『師伏堂

『春秋講義』にはこの他にも、専ら皮錫瑞のいう大義の方面について述べた一条も見出される。上巻の第十二条に云う。

『左氏伝』を読むに、先づ『春秋』経を読むを要す。『春秋』経を読むに、先づ孔子、『春秋』を作るの大義を知るを要す。大義、何くにか在る。孟子、之を明言す。曰はく「世衰へ道微にして、邪説暴行、又た作る。……孔子懼れ、『春秋』を作る」と。孟子の説に拠れば、是れ孔子の『春秋』を作るは、是れ当時の人の父を無みし君を無みするを懼れ、尤も人の倡へて父を無みし君を無みするの邪説を為し、乱賊、益々忌む所無きを懼る。……孔子、乱賊を誅し、必ず邪説を息めんと欲す。故に『春秋』を作りて以て大義を明らかにし、天下をして乱臣賊子は人人得て之を誅するを知り、自ら容るる所無くして懼れしむ。此れ孔子の『春秋』を成すこと、禹の洪水を抑へ、周公の夷狄を兼ね猛獸を驅るの功に比すべく、孟子、以て天下の一治と為す所以なり。然らば則ち孔子の空言を以て世に垂れ、万世の師表と為るは、首めに『春秋』一書に在り。故に孟子、又た舜・禹・湯・文・武・周公よりして孔子の『春秋』を作るを称す。朱注に「此れ又た上章に群聖を歴叙するを承けて、因りて孔子の事を以て之を継ぐ。而して孔子の事は、『春秋』より大なるは莫し。故に特に之を言ふ」と。『孟子』の両処の文は、正に互ひに相ひ發明するなり。

ここでもやはり、南学会第八次講義を継承しつつ、後の『経

学通論』と同様に、『孟子』とその朱子の注を引用して自説を論証している。この『師伏堂春秋講義』は、『経学通論』に先んじて『春秋』の微言大義を言明したものと見て、注目すべき著作と言えよう。

ところで、皮錫瑞の著名な著作に『経学歴史』があるが、該書の一部は、やはり湖南師範館における講義原稿に基づくことが指摘されている。このように、旧稿に整理を加えて著作をまとめることが、皮錫瑞の著述スタイルの一つとするならば、『経学通論』春秋部分の少なくとも一部は、『師伏堂春秋講義』を継承したものと見てよいだろう。南学会第八次講義をもとに、『師伏堂春秋講義』では微言大義の定義を加え、これを更に整理することで、定論としての『経学通論』の説が形成されたと考えられるのである。

おわりに

本稿では、微言大義の定義として広く知られた皮錫瑞の説を改めて取り上げ、その時代背景や形成過程に考察を加えた。

皮錫瑞の説には、『孟子』によって『春秋』の微言大義を定義することや、その定義を『孟子』の趙岐注・朱子注によって論証するという特徴が認められたが、その背景には、遑れば戊戌変法期における梁啓超との交流や、葉德輝との論難を想定することができると考えられる。しかも、当時の南学会での講義は、その後、時間をかけて肉づけされ、『師伏堂春秋講義』に至って、今文

学派のスローガンとも言うべき微言大義の語に結びつけられた。このように、従来、微言大義に関する言説を代表するものとして扱われてきた皮錫瑞の説には、当然のことながら、その独自の背景が認められるのである。それならば、これを微言大義に関する公約数的言説とすることは、一度、留保する必要があるのではないか。しかも、この説は『春秋』一経に対するものに過ぎない。今文学者が微言大義の存在を認めるのは、何も『春秋』に限らないのであるから、その微言大義に関する言説は、今後、より広い視野で、さらに個別具体的に検討し直す必要がある。

注

- (1) 梁啓超『清代學術概論』二十二、支偉成『清代樸學大師列伝』常州派今文經學家列伝叙目。また『漢書』芸文志に「昔仲尼没而微言絶、七十子喪而大義乖」とあり、劉歆伝にもほぼ同じ文が見られる。
- (2) 狩野直喜『春秋研究』（みすず書房、一九九四。原講義一九一―一九一四）第五章・第九章、小島祐馬『公羊家の三科九旨説』（同『中国の社会思想』、筑摩書房、一九六七所収。論文初出は一九二〇）、阮芝生『従公羊学論春秋の性質』（国立台湾大学文学院、一九六九）第三章、黄開国『清代今文經学的興起』（巴蜀書社、二〇〇八）第一章、曾亦・郭曉東『春秋公羊学史』（華東師範大学出版社、二

〇一七）第一章など。

- (3) 黎漢基『經学通論』辨証・以皮錫瑞『春秋』改制思想為討論起点（中央編訳出版社、二〇二〇）第三章「微言」与「大義」的分拆は、皮錫瑞説を取り上げた貴重な研究だが、皮錫瑞が論拠とする『孟子』に微言や大義の語が見られないことなどを根拠に、皮説を附会と斥ける。しかし、この語と今文学派との関係を考慮するならば、単なる附会とするのではなく、かかる説を唱えるに至った背景こそを明らかにしなければなるまい。

- (4) 『經学通論』春秋第一条「論『春秋』大義在誅討乱賊、微言在改立法制、孟子之言与『公羊』合、朱子之注深得孟子之旨」なお、本稿における皮錫瑞の著作の引用は全て呉仰湘編『皮錫瑞全集』（中華書局、二〇一五）による。

- (5) 『公羊伝』昭公十二年に「春秋」之信史也。其序則齊桓・晋文、其会則主会者為之也。其詞則丘有罪焉耳」とある。

- (6) 本条の前半部分で、皮錫瑞は『孟子』の「天子之事」を微言として整理していたが、同じく『經学通論』春秋の第四十三条「論宋五子説『春秋』有特見、与孟子・『公羊』合、足正杜預以後之陋見謬解」に「其義在『孟子』云「天子之事」、『公羊』云「素王改制」とあり、これによれば微言「天子之事（『孟子』）」「素王改制（『公羊』）」と整理することができるとが、

- (7) 小野川秀美『清末政治思想研究』（平凡社、二〇〇九）

原著初版は一九六九) 第五章「戊戌変法と湖南省」、羅志田「思想觀念与社会角色的錯位・王先謙・葉德輝与戊戌前後湖南新旧之爭」(同『道出于二…過渡時代的新旧之爭』、北京師範大学出版社、二〇一四所収。論文初出は一九九八) など。

(8) 梁啓超『清代學術概論』二十五

(9) 『皮錫瑞日記』光緒二十三年十二月初一日条

(10) ともに『湖南時務學堂遺編』所収

(11) 『皮錫瑞日記』光緒二十三年十一月廿九日条

(12) 『皮錫瑞日記』光緒二十三年十二月初三日条

(13) 『經學通論』春秋第七條「論『春秋』改制猶今人言變法、損益四代、孔子以告顏淵、其作『春秋』亦即此意」

(14) 『輜軒今語』は、張之洞の『輜軒語』に倣って、学政の

立場から為学の綱領を示したもので、經学・史学・諸子学・宋学の四部門から成る。その經学部門のうち「經学当先通『春秋公羊伝』」条に、やはり「読春秋界説」と同様の記述が見られる。『輜軒今語』は葉德輝の駁論を加えた『輜軒今語評』に附載するかたちで『翼教叢編』巻四に所収。

(15) 注(7) 所掲小野川書第五章、吳仰湘『通經致用一代師——皮錫瑞生平思想研究』(岳麓書社、二〇〇二) 第四章を参照。

(16) 公都子の誤りか。以下の「孔子成『春秋』」云々は『孟子』滕文公下篇の公都子との問答中に見られる。

(17) 「皮鹿門学長南学会第八次講義」(『湘報』第三十五号、光緒二十四年三月二十五日に掲載。原稿は『皮錫瑞日記』光緒二十四年三月十六日条)

(18) 当時、皮錫瑞と葉德輝との間に交わされた相互の論難については、注(7) 所掲小野川書第五章の六、注(15) 所掲吳書第四章第三節、及び張晶萍『守望斯文・葉德輝的生命歷程和思想世界』(中国社会科学出版社、二〇一一) 第二章第二節を参照。

(19) 『翼教叢編』巻四所収『輜軒今語評』「經学当先通『春秋公羊伝』」条、「四書宜留心熟読」条

(20) 『翼教叢編』巻六所収「葉吏部答皮鹿門書」附來書

(21) 『皮錫瑞日記』光緒二十四年四月初七日条

(22) 吳仰湘『皮錫瑞的經学成就与經学思想』(湖南大学出版社、二〇一三) 第八章

(23) このことを、皮錫瑞は端的に「孔子所定六經、皆有微言大義」と述べる(『經学通論』詩經第二十七條「論先魯後殷、新周故宋見『楽緯』、三頌有『春秋』存三統之義」)。